

# もっと地域社会に開いていこう

——これからの漁村・漁協がむかうかたちとは？——

北海道大学観光学高等研究センター教授 敷田麻実さん

(インタビュー・構成：MANA：中島 満)



## ●プロフィール（しきだ・あさみ）●

1960年石川県加賀市生まれ。高知大学農学部栽培漁業学科卒。3年在学中3ヶ月マグロ延縄漁船乗船。1983年から石川県水産課勤務。その間豪州・ジェイムスクック大学大学院留学「沿岸管理学」専攻修了、帰国後金沢大学大学院博士課程修了「今後の沿岸域管理システムに関する社会経済学的研究」で博士号取得。1997年水産課在職中ナホトカ号重油流出事故対策を担当、1998年石川県退職。金沢工業大学助教授、教授をへて2007年4月から北海道大学観光学高等研究センター教授。専門はエコツーリズム・地域マネジメント。

沿岸漁業のこれからのを考えていくとき、地先の海の管理についてどのようにのぞんでいったらよいのだろうか。「獲り」「つくり育て

る」漁業の多様な「かたち」のほかに、これまでにはなかったような取り組みへの足がかりはみつけれないだろうか。今回は、「沿岸管理」を専門に研究され、漁業の世界にも斬新な提案を続けてこられた敷田麻実先生に、沿岸漁業がこれから何を目指すべきか、そのポイントについてお話を伺いました。

## 「開いて」「守る」付き合い方

——先生は「沿岸域管理」に、もうひとつ「エコツーリズム」という専門のテーマをお持ちです。海という自然を楽しみにやってくる「観光」を成り立たせるためには、何がポイントとなるのでしょうか。

自然という環境を景観を楽しむ目的だけではなく地域社会との交流や体験をとおして、環境を学び遊び楽しむことを観光の目的にしたエコツーリズムが現在注目されていますが、地域にとって「万能薬」ではないと考えています。

観光とはなんのでしょうか。もともと、よそから人が来て成り立ちますが、地域にとってみますと、「よそもの」である人たちの期待に

こたえながら、その地域のよいところも、「よそもの」にとっては窮屈な地域のきまりごともありますから、じょうずに“なだめ”、そうした要素も観光として生かし楽しんでもらって、地域が豊かになる、観光とは、その道具と考えればよいのです。だから、地域のもつ特徴によってケース・バイ・ケース、いろいろな道具の使い方があるでしょう。

わたしは、その地域からみたときに「開いて守る」ということが観光を成立させる仕組みづくりの上で大切なカギになると思います。

——閉鎖的と見られがちな漁業の世界にとって、言い得て妙の言葉ですね。「開放的」であって「閉鎖的」、どうやって開いていくかということですか。

「閉じて」「守る」ということのほうが、簡単そうに思えますが、実は、トラブルが多く起きて、その対応に追われ、結局うまくいきません。閉じっぱなし、守りっぱなしでは、楽しんだり遊んだりする人の心に訴えるものはおきません。その状態で、海がきれいですよ、お魚がおいしいですよとアピールしたところで、その地域のことを「よそもの」たちは本当には信用しないでしょうね。

「よそもの」という言葉を使いましたが、言い換えれば、「他者のまなざし」を持っている人です。「異質」のまなざしを持つ人が、「均質」な人がかたまってきた地域に入れば、トラブルが起きることもあるでしょう。

ところが、この人たちは、地域にとっては、

よそ者のヤっカイ者になる場合もあれば、実は、また同時に新しい情報や価値観をもたらしてくれるトリックスター（いたずら好きの旅人）の役割を演じてくれる人でもあるわけです。地域が活気付くためには、「よそもの」をどんどん受け入れることが大切ですが、もうひとつ、開くだけではダメなのです。

## 内なる「よそもの」の役割が大切です

——少々古い時代の言葉でたとえれば「旅人」もいれば「旅芸人」や優秀な技能知識をもった「遊歴する人々」などいろいろな「よそもの」を受け入れて、楽しんだり、情報交換したりする場を提供する役を地域の人が演じるということですね。漁業の場合もこの関係と同じことが考えられそうですね。

そうそう。この前の回に登場していた金萬智男さん（木更津・JF金田所属、NPO盤州里海の会代表）とは、何度もお会いしていますが、いつも金萬さんと意気投合するのは、そういうところなんです。「よそもの」とは、「地域」の外の人をいうだけではなく、実は、地域の内側にも「よそもの」がいて、その人がとても大切な役を演じることになります。

金萬智男さんが実は、その「よそもの」なんです。昔からの漁業世界という「均質」な地域の人々のなかにいるけれど、よい意味の「異質」な個性（アイデンティティ）をも

って、内側にも外側にも、その地域にしかない特徴的で魅力的な産物（浅草海苔やハマグリ）や風景（東京湾）や自然（干潟や海）を選び出して、行動のメニュー（漁業体験や観察）とセットにしてアピールしているわけです。

これからのことを考えようとするときに、地域（世界といってもよいかもしれません）の中で、漁業産業という生産販売加工のひとつの選択肢しかないと思いついでいるかぎりでは、下方スパイラル状況からは抜け出せないのではないのでしょうか。

“開いて” “守る” というのは、このように、内なる「よそのもの」の個性的活動を地域が支え応援するしくみがつくられてこそ、外から「よそのもの」たちをひきつけ、内なる「よそのもの」たちとの交流を核にして「協働」による地域づくりが前に進んでいくのだと思います。

## 地域社会に貢献する二つの方法

沿岸域管理と漁業（私は「漁業コミュニティ」と呼んでいます）の立場を考えたとき、2001年「地域漁業学会」主催で開かれた「漁業者と都市住民の交流・連携」シンポジウムで「漁業の変遷と今後の沿岸域利用一対立から調和、さらに持続可能性の実現へ」と題する報告をしました。「地域漁業研究」（第41巻第3号、2001年6月）に論文としてまとめてありますが、その最後に次のように書きました。

「このような沿岸域利用者コミュニティによる沿岸域管理は、なによりも持続可能な沿岸域利用の実現のためであり、それは利用者自身が沿岸域の利用と保全を自律的に管理する状態を目指している。この点では、沿岸域の利用者でありながら、一方で地域資源を管理してきた歴史的叡智をもつ漁業に対する期待は大きく、漁業コミュニティの再配置による沿岸域管理の実現は可能性が高い。」

## 顔の見える海の利用が基本

たしかに、この段階では、漁業コミュニティへの可能性を期待していたのですが、現在になって振り返ってみても、「自律的」に管理していこうとする具体的な動きにはなっていません。

わたしが提示してきた沿岸域管理の基本ユニットというのは、あくまで沿岸域と密接に関係する狭い範囲をエリアとする管理主体です。そして、そこで解決できない問題がある場合に限り、道県のような広域にまたがる管理主体で解決していこうという二段構えです。基本原則は、ミニマムな単位の地域が地先の海の管理を担っていきます。いわば、顔の見えるような関係の狭い範囲の海を練習場にして、管理のトレーニングを積んでいくということですね。

——「漁業コミュニティ」としての漁協や漁村の担い方ということですね。

私の知りうる範囲に過ぎませんが、現在まで「自律的」な動きが見られないということをお話しました。ある意味で、「管理」ということは、利用の優先順位を決めることと言い換えてもよいのですが、その場合、現在の担い方のままでよいのかということが必ず問題になります。

まず、管理の対象物を自分たちが一生懸命にお世話しているということがあって、そしてそのものの使い方をよく知っている、そういう人に管理の優先順位が与えられるわけです。それは、土地や陸上の管理の場合でもきっと同じだろうと思います。

漁業の場合、この優先順位を与えられる前に、漁業に求められている社会的な役割を認識して、地先の海をお世話しているということをもっともっと外に向かって、いろいろな考え方をもち仕事をする人々がくらす地域社会に対して納得してもらおう行動に移さなければいけないのではないのでしょうか。

そして、地域社会に対して、もっと積極的に開こうという意思を示し、そして漁業が地域社会に具体的な貢献をしていることを示すための行動を起こしていかなくてはならないのだと思います。

貢献の仕方は二つあります。

ひとつは、経済的な貢献です。水揚げをして流通にのせ食料を供給しているということではなく、もっと身近な地域経済社会に積極的に加わって具体的な地域への参加度合いをもっともっと深めていくことが求められるでしょう。

そして、もうひとつは、非経済的な貢献です。清掃活動や森づくり活動など陸上でも可能な環境保全の労務提供活動や環境教育活動の実践などをモデル地区が行うというレベルではなく、全県、全国的な箇所での実績を積み上げていくことです。

すでに、やっているという主張をされるかもしれませんが。まだまだ「いまの管理のままているのが当然だ」という、漁業は、歴史的にみて「特別」な産業の性質があって、「どこか他人排他的な仕組みがあってもしょうがない」という「エクセプトワン」の考え方を持っている地域が多いのではないのでしょうか。

「よその」たちをひきつけるような開かれた漁業となって、あの人なら管理の優先権をもっていて、お世話を任せても安心だ、となるための漁業コミュニティとなってほしいと願っています。

●エピローグ：敷田麻実先生のホームページには、これまで発表されてきた研究・調査報告、随想などのたくさんの文章のほか趣味の山歩きや海岸散策、ペットのことから自宅の庭の雑木林化構想などがぎっしりと詰まっています。高知大学時代の「大学生、マグロ船に乗る」体験記の新聞連載記事も載っています。URL：

<http://www.geocities.jp/yumebouken2000/>

copyright 2007, manabooks-m. nakajima,  
& Asami. Sikida, & J FKyouuiren